

## 『赤と黒』における〈聖堂〉：第1部・第18章の制作をめぐって

高木, 信宏  
九州大学大学院人文科学研究院

<https://doi.org/10.15017/8788>

---

出版情報 : Stella. 23, pp.19-49, 2004-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :



# 『赤と黒』における〈聖堂〉

## ——第1部・第18章の制作をめぐる——

高 木 信 宏

『赤と黒』第1部・第18章には2つの着想源があったことが、従来の研究によって明らかになっている。まず章の前段をなす、国王歓迎の準備から歓待セレモニーにいたる部分にかんしていえば、源泉となったのは1829年10月末のナポリ国王によるグルノーブル行幸であり、すでに我々は別の場所で前段部分の制作をとりあげて検証した<sup>1)</sup>。その要点をごく手短かにいえば、スタンダーは故郷でのセレモニーを実見しておらず、報道に想をえて国王奉迎のエピソードを中心に挿話の原型を翌月中にパリで作成したのではないかというものである。これを踏まえて本稿では、もうひとつの材源と目される史実、すなわち1830年4月末に首都で催された聖遺物祭典と小説の制作との関係を考察する。聖遺物崇拝は現行のテキストにおいて同章中段以降の展開を統べる重要な主題であるが、しかし従来の研究にあっては、作家がいつ、どのようにして時期の違う2源泉を接合し、章全体を構築したのかという問題は手つかずのままになっていた。我々としては、祭典をめぐる新聞報道や当時の政治的・社会的状況、小説の印刷工程などの具体的な検証をつうじて第18章制作の実態に迫りたい<sup>2)</sup>。

### 1. 原稿から校正へ

まず着想源となった、シャルル10世による聖ヴァンサン・ド・ポール聖遺物崇拝についてごく簡単に触れておこう。1830年4月25日、パリ大司教イヤサント＝ルイ・ド・ケラン伯爵の指揮のもと、首都にあったラザリスト会の礼拝堂に問題の聖遺物が移された。時代がかった壮麗な儀式が宗教界をあげて催されたが、そうであるだけに政治色を帯びた行事であることは誰の目にも明ら

かであったろう。憲章の解釈をめぐり国王と議会在衝突するなど、すでに7月革命の火種が燦る社会情勢下にあつて、この催事は教権の強化を狙った示威行動と受けとめられた。政府系の新聞がこぞって移送の一部始終を伝えるいっぽう、反政府系各紙は黙殺ないしは批判記事を掲載した。たとえばフランス教会派の小新聞「ガゼット・デ・キュルト」紙は聖遺物の真贋を問うて批判の急先鋒に立ち、また「タン」紙は揶揄をまじえて行事の模様を報じている<sup>3)</sup>。

このような政治的文脈もあつて、当初からスタンダールは聖遺物祭典に注目していたにちがいない。さらに移送の数日後、『赤と黒』の創作に直接かかわる出来事が起きる。同月29日、時の国王シャルル10世がラザリスト会の礼拝堂を訪れて聖遺物を崇拝した。「モニトゥール」「コティディエンヌ」「ガゼット・ド・フランス」など、政府系各紙が詳細を一様に報じ、そのいずれかの記事が作家の目にとまったのである。このことが聖遺物崇拝の挿話として第18章（以下、第1部にかんしては章数のみを記す）に結実したことは、クロード・リブランディが綿密な考証にもとづき異論の余地なく解明した<sup>4)</sup>。彼は報道内容を小説に照らし合わせ、主題や人物像などの類似点を指摘したばかりでなく、作家が別の章においても記事の文面を敷き写した事実を見事に論証したのである。むろんリブランディの功績は、『赤と黒』の創作とジャーナリズムとの密接な関係を裏づける貴重な手がかりを提出した点だけにとどまらない。制作過程の実態にせまるうえでも、その貢献は大であったといえよう。スタンダール自身の回想によれば、出版社との交渉前に相当の加筆をおこなったという——「マルセイユで、1828年にであったと思うが、私は『赤』の草稿をあまりにも短くしてしまった。リュテス〔パリ〕でそれを印刷させようとしたとき、私は数頁の削除や文体の手直しでは間に合わず、実質的な書き足しをせざるをえなかった」<sup>5)</sup>。だが、リブランディの論考を踏まえるならば、作家が第18章を大きく修正したのは、原稿の提出後だったと推定できる。

まず、スタンダールがルヴァヴァスール書店と『赤と黒』の出版契約を交わしたのは、1830年4月8日（ちなみにこの時点での題名はまだ主人公名の『ジュリアン』のまま）<sup>6)</sup>。ついで第1部の原稿を書店側に渡し終えたのが4日後の12日である——「1830年〔4月〕12日。第1巻最後の清書原稿を送る」<sup>7)</sup>。第2部の原稿にかんしては、入稿の日時を特定させる備忘は残されていない。とはいえ、聖遺物の移送が行われた同25日のメモには、「およそ180枚まで

『ジュリアン』を清書する仕事を4時間半かけてした後、ヴェロン氏に『棺』を送付する<sup>8)</sup>とあり、この日付以降であることは確かだ。第1巻の校正が5月初旬につつがなく始まっているところを見ると、作家は契約書に違わず、4月末までに第2巻の原稿を渡し終えたと思われる。

以上の経過から明白のように、スタンダールが聖遺物関連の記事に接したのは、まさに小説第1部の組版がおこなわれていた時期である。とうぜん第18章の修正は清書原稿ではなく、校正刷をもとになされたはずだ。ただし作家の行った校正の工程は、今日の一般的なそれとはおよそ異なっていたと思われるので、まずはこの点について詳しく見ておこう。

たとえば、バルザックがどのように校正をおこなったのかについては、テオフィル・ゴージェの証言等によってよく知られるところとなった<sup>9)</sup>。バルザックは「棒組校正刷 placard」による校正をただけでなく、二校、三校と推敲に推敲を重ねた。つまりこの作家のばあい、校正作業は独自の文学創造に不可欠な段階をなしていたのであり、むろんかような創作方法がとられたのには、彼自身がかつて印刷所を営み、活版技術に精通していたことが大きく与っている。

ではスタンダールのばあいはどうか。すでにアンリ・マルチノが『赤と黒』の校正について仮説をたてているが<sup>10)</sup>、しかし十分に論を尽くしているとはいいがたく、また彼が確認できなかった備忘なども今日活字になっているからには、この問題を再検討する余地はまだ残されよう。周知のように『赤と黒』のばあい、草稿や原稿、校正刷など、そのいっさいが現存せず、書簡や備忘などから校正の工程を推測するほかない。それらから察するに、彼はバルザックのように追加料金を支払ってまで、校正をたび重ねることはなかったのではないかと思われる。以下に関連するメモを挙げると――

1830年5月10日、『ジュリアン』のための最初の校了 (premier bon à tirer pour *Julien*)。

1830年5月10日、『赤』の第1葉 (première feuille du *Rouge*)。

1830年5月12日、私は『赤と黒』の第3シート (the third sheet of *Rouge et Noir*) を校正する。<sup>11)</sup>



前述したように、第1部の清書原稿の手渡し日は4月12日。メモの日付まで約1カ月が経過した計算になるが、この間に校正にかんする証言を作家はまったく残していない。しかも見逃してはならないのは、ここで彼が使っているのが「épreuve」や「placard」ではなく、「feuille / sheet」という語であることだ。各覚書の日付とそれぞれの語に付された序数詞から考えて、いずれの用語も同じものを指すと推測できるが、とりわけ重要なのは最初のメモにある「校了・<sup>きよずり</sup>清刷 bon à tirer」という用語であろう。当時の一般的な出版の工程に照らすならば<sup>12)</sup>、「初校 premières épreuves」とはあらかじめ印刷所の校正係が校閲するゲラ刷を指す。したがって著者が最初に受けとるのは、じっさいには「第二校 secondes épreuves」となるわけだが、混同を避けるためにこちらを「著者初校 premières d'auteur」と呼称し区別することもあった。また「第二校」という語は、「清刷」にも充てられたとされるように、当時であって著者が〈初校〉をもって校了とすることは決して稀ではなかったのである。するとスタンダールが覚書で言及しているのは、ゲラ刷、つまり頁割のされていない仮組校正刷ではなく、最終的な本組校正刷なのではないだろうか。この「清刷」をフランスでは「bonnes feuilles」と呼ぶこともあるので、作家が前掲の備忘でもちいている「feuille」あるいは「sheet」もその意味で解することができる。とすれば、彼はそれらを初校のみで順次校了していったと考えられるのだが、はたして本当にそうなのか。ひきつづき作家の覚書を見ていこう――

1830年5月14日、[...]『ジュリアン』の第6ないし第7シートのために「ヴェリエールに戻る」を送る (J'envoie the retour in Verrières for the 6th or 7th sheet of *Julien*.)。<sup>13)</sup>

このメモにある「ヴェリエールに戻る」とは、主人公ジュリアンがシェラン司祭に会うために一時的にヴェルジーからヴェリエールへ戻る挿話を指す。現行テキストでは、第10章半ばから第11章冒頭にかけての部分に相当する。この覚書は従来スタンダール研究者の関心を引くことはほとんどなかったが、記述内容を『赤と黒』の初版に照らすならば、その重要性は看過しがたい。

1831年にルヴァヴァスール書店から刊行された同初版は、398頁と486頁の全2巻からなる8折判である。とうぜん16頁単位の折丁<sup>カイエ</sup>となるわけだが、じっさいに初版本を繙いてみると、たしかに第1頁から16頁ごとに巻と丁合の順

序を示す通し番号がふられている<sup>14)</sup>。しかも問題の「ヴェリエールに戻る」という挿話は、たしかにスタンダールの見立てどおり、第7番目の折丁に含まれているのだ。してみれば我々の推測するように、校正にもちいられたのは仮組ではなく、初版の折丁とほぼ同内容の本組校正刷だったはずである。そうでなければ、加筆部分がどの校正刷に含まれることになるのか、その見当をつけることはかなうまい。作家のもちいる«feuille / sheet»という語は、やはりいずれも清刷を指すと見なせよう。

とはいえ、前掲メモの解説はこれで終わったわけではない。「第6ないしは第7シートのために」と曖昧に記されたのは失念によるのではなく、この時点ではスタンダールが第7番目の校正刷をまだ手にしていなかったためではないか。おそらく彼は追加部分がどの折丁に該当するのかを、校了済みの部分から推測しているのだ。その蓋然性は次の覚書によっていや増そう——「1830年5月21日、『赤と黒』の第7シートを校正する」<sup>15)</sup>。このように「第7シート」が、5月14日付メモの1週間後に校正されている以上、「ヴェリエールに戻る」という挿話が校正刷に直接加筆されたはずはない。となると作家は、手元に返された原稿か、あるいは職工の校閲したゲラ刷を参照しながら、第7番目の清刷の出来までに問題の挿話を別紙にしたため、あらかじめ印刷所へ送っておいたと考えられる。

かくのごときが校正中に大幅な修正をくわえる際、スタンダールのとった方法であったことは、翌月1日付の備忘にも窺い知れる——「ブザンソンの大聖堂の場景を口述筆記する」<sup>16)</sup>。言及されているのは、第28章全体を占める挿話であり、初版では12頁の分量である。はたして校正刷の余白に、これだけ多量の加筆をなしえたであろうか。筆耕を雇っての口述筆記であるからには、別紙をもちいて増補部分を作成したと見なすのが自然であろう。この追加稿もまた「ヴェリエールに戻る」の挿話と同じく、ゲラ刷が本組になる前に印刷所に送られたはずであり、その清刷の出来は6月初旬と見積もることができる。

もっとも、小説の校正はこのあと11月まで続いているのだから、本当に第1部の校正刷は初校のみで校了されたのか、と疑問視する向きもあるかもしれない。しかしながら1831年7月1日付の覚書には、第1部の校正時期にかんする注目すべき記述がある——「少なくとも1830年5月から第1巻を、また11月以来第2巻を再読していなかった」<sup>17)</sup>。これを第2部の校正開始を示す別の備

忘——「1830年6月22日。『ジュリアン』の第2巻」<sup>18)</sup>——と照らし合わせるならば（たしかに作家の記憶には多少の誤差が見られるとはいえ）、第1部の校正は5月10日から6月22日にかけておこなわれ、それ以後は彼の手を完全に離れたことが分かる。

もはや『赤と黒』における校正の実態はおおよそ把握できたと思うが、念のためもうひとつの事例を見ておこう。『パルムの僧院』のばあい、草稿が仕上がったのが1838年12月26日、アンブロワーズ・デュボン書店との間で出版の契約が交わされたのは翌年の1月19日である。以後の校正の工程に関する覚書を挙げると——

[1839年1月29日]、草稿 (manuscrit) はアンブロワーズにある。

1839年2月27日、火曜日。『カストロの尼』の最終シート。『パルムの僧院』の第15シート (15 th sheet of *La Chartreuse de Parme*)。

[1839年3月26日]、1838年11月4日。1838年12月26日。最初のシート (first sheet)、2月6日；最終シート (last sheet)、1839年3月26日。

1839年3月26日、6時10分、『パルムの僧院』最終シートの校了およびこの作品の終了 (le bon à tirer of the last sheet of *the Chartreuse of Parme* and the end of that opus)。<sup>19)</sup>

これらを見ると、契約締結から18日後の2月6日に最初の校正刷ができ、その日から50日間にわたって校正作業がおこなわれたと推察できる。やはりスタンダールはここでも「シート」という語をもちいているが、最後の「シート」の校了が3月26日、小説の発刊日が4月6日であることから考えて、この語はやはり本組校正刷を指すと見なせよう。ところで興味深いことに、『パルムの僧院』の初版も8折本全2巻（402頁と445頁）からなり、『赤と黒』の初版とはほぼ同じ分量であるが、校正に要した日数は前者のほうがはるかに短い。後者のばあい、第2部の校正開始は1830年6月22日なので、第1部の校正だけで約40日を要した計算になる。この相違から推量しても、『パルムの僧院』の校正は校閲や字句の手直しが中心であったのに対し、やはり『赤と黒』のほうは校正期間中にさうとう大きな加筆修正があったと考えられよう。

以上の検証によって、スタンダーが『赤と黒』でとった校正の方法はほぼ明らかになったと思う。ゲラ刷ではなく本組校正刷を使用し、初校をもって校了とする。大きな加筆は、当該箇所が清刷になる前にあらかじめ印刷所に送っておく、というものである<sup>20)</sup>。さて、こういった校正の手順において我々が最も注目するのは、作家にとっての制約である。各校正刷はもちろん第1番目の校正刷から丁合の順に本組されていくが、頁割の関係から第2番目以降の刷り出しは、かならず先行シートの校了を待ってなされることになる。組版作業が後続の校正刷に移ったのちに、すでに校了とした校正刷に大量の加筆・修正をすることは当然ながら版型の大幅な組み直しにつながり、スタンダーにしてみれば、時間と経費の点から見て、そうそう簡単に印刷所に頼めるものではなかったはずだ<sup>21)</sup>。彼がどの小説でも各頁ごとに修正用の白紙が挟み込まれた自家用本を特注したのも、かかる推敲上の制約を解消するためであったと思われる。ところで作家にとっての制約は、第18章の修正時期を特定しようと試みる我々にとっては、かえって好都合なのである。というのも、校正作業の進捗にほぼ並行して修正もおこなわれたと見なせるからだ。

## 2. 第18章の修正時期

では、さっそく上記の校正方法を踏まえて、第18章が、いつ、どのようにして成立したのかを検討していこう。スタンダーがシャルル10世による聖ヴァンサン・ド・ポール聖遺物崇拜にかんする報道をじっさいに読んだことは、第5章に当該記事からの敷き写しが認められる点から確実である。式典を報じた新聞のうち最も若い日付をもつのは、同月1日付の「モニトゥール」紙と「コティディエンヌ」紙であるが、しかし我々としては2日付「ガゼット・ド・フランス」紙こそ着想においてきわめて重要な役割を果たしたと考える。なぜならば、同紙には前2紙と同内容の詳細だけでなく、作家の関心を引きえた別の記事が第3面に掲載されていたからだ。すなわち、フランス王太子のグルノーブル行啓である――

4月25日、グルノーブルからの通信

王太子殿下は県知事閣下の懇願にもとづき、殿下のグルノーブル奉迎のためにイ

ゼール県において騎馬護衛隊を組織することをご許可になった。この吉報は一昨日、電信によって伝えられた。すでに我らが都市の青年 30 名ほどが、護衛隊への参加申込みを済ませており、周辺の郡部でもほぼ同じくらいの大勢の人びとが同様の意志を表明している。<sup>22)</sup>

王族の巡幸と騎馬護衛隊の組織。いうまでもなく、これは第 18 章の主要モチーフである。同章の源泉をめぐる従来の考証において、『イタリア絵画史』(1817 年) やラモット＝ランゴン『知事殿』(1825 年) がことのほか注目されたのも、それらが相同のテーマを含んでいたからである。そうであるだけに、この短い通信と創作との関係を検討せずにすまずことはできない。

この年の 4 月初旬、反政府系新聞「コンスティテュシヨネル」紙の報道によって、「コティディエンヌ」紙と「ガゼット・ド・フランス」紙、つまり王党派の新聞同士による衝突が顕在化した<sup>23)</sup>。5 月 15 日付の「グローブ」紙が報じているように、翌月に入っても政策をめぐる対立は終息せず、反政府系ジャーナリズムのほうも相変わらず関心を寄せていた。たしかに些細な出来事であるとはいえ、スタンダールはこれを見過ごさなかった。ピエール＝ジョルジュ・カステックスがいみじくも指摘したように<sup>24)</sup>、『赤と黒』第 2 部・第 4 章には両紙の反目についての仄めかしがある。おそらくは作家自ら両紙に目を通し、ことの顛末をずっと見守っていたのではあるまいか。ならば彼が 5 月 2 日付の「ガゼット・ド・フランス」紙を手にした蓋然性はきわめて大きいといえるだろう<sup>25)</sup>。

それでは問題の通信文が伝える出来事は、第 18 章の創作においていかなる役割を果たしたのか。周知のように、「国王ヴェリエールに赴く」と題された同章には、すでにカステックスの論証した着想源が存在する。ナポリ国王フランソワ 1 世のグルノーブル行幸を報じた、1829 年 11 月 6 日付の新聞記事である。別稿で我々は彼の説にもとづいて同章の制作時期を記事から間もない同月の半ばと推測した。しかし、これまで研究者により指摘されなかった翌年 5 月の史実、王太子のグルノーブル行啓のほうも、聖遺物関連のセレモニーと時期を接するだけに、いちおう挿話全体の着想源となった可能性を検討しておかねばならない。つまりナポリ国王の行幸は挿話の成立とは無関係であり、じっさいには後者のほうが創作の跳躍台の役目を果たし、第 18 章全体が校正の段階で加

筆されたということもなきにしもあらずなのだ。

結論を先に述べると、やはりカステックスの説は動かしがたい。その理由としては以下の3点を挙げておく——まず第1に、小説における国王の表記がナポリ国王を想起させる点である。当時新聞などで国王シャルル10世を指すばあい、「le Roi」とするのが通例であったのに対し、章題は不定冠詞の付された「Un roi à Verrières」[94]であり、また本文中では「le roi de \*\*\*」という、いかにも「ナポリ国王 le roi de Naples」への連想を許すような表記が用いられている。この伏せ字になった「国王」が時の玉座にあったシャルル10世を仄めかすものでないことは、別の箇所での名が明示されている点から見ても間違いない<sup>26)</sup>。

つぎに砲声と鐘をめぐり記事の描写と小説のそれとの類似も、カステックスが強調するように有力な論拠である<sup>27)</sup>。王族奉迎の様子が新聞等で報じられるとき、いわゆる舞台装置の定番として最もよく登場するのは、凱旋門や花飾り、百合の花などであるが、しかし『赤と黒』ではこれらにかんする言及は見あたらず、とりわけ重要な役割を担っているのは大砲である——「たちまちこの大事件の喜びを告げるかのように、方々の鐘が鳴り出し、町の所有する古いスペインの大砲がつづいて発射された」[97]。これは1829年11月6日付「コティディエンヌ」紙で描かれる、グルノーブル近郊トゥーヴェでの奉迎の様子を想起させる——「両陛下のご到着が、城から大砲の発射で告げられた」；「陛下への献花の間中、城のすべての大砲が礼砲を撃ち続けた。101発の祝砲が撃たれた」<sup>28)</sup>。しかも王族の巡幸関連の記事において、このように繰り返し砲声にかんする詳細が報じられるのは、むしろ例外に属することも留意されたい。また小説では式辞をすべて聞き終えた国王が町へ入るときにも「小さな大砲がふたたび立てつづけに轟き」[98]はじめるとあるが、記事のほうでも同様にグルノーブル市長ピナ氏の式辞のあと、「両陛下は、大砲の連射音と市内中の鐘の音が響きわたるなか、ひしめく市民のあげる〈国王万歳！ブルボン家万歳！〉という歓声と喝采のうねりにつつまれて市中にお入りになった」と記されている<sup>29)</sup>。このほか砲声は、主人公ジュリアンが危うく落馬しかける場面にも登場するのだが、軍服をまとった彼の英雄主義的な夢想を描くには、まさに打ってつけの舞台装置だといえよう<sup>30)</sup>。

第3の根拠として注目するのは、物語細部の不整合である。第18章の冒頭、

国王行幸の一報は「9月3日」[94]のことで記されている。しかるに先行する第10章でのジュリアンとレナール氏との会話には、「明後日が1日だから、その日から月に50フランだそう」[59]とある。問題は、そのあと同日内の挿話のなかで「8月の太陽」という記述が登場する点だ。つまりこれらの言及だけを見るならば、ここでいう明後日は9月1日となり、さらに以後の時間経過を勘案すると国王の行幸は10月3日でなければおかしい。なぜ、このような不整合が生じたのか。おそらくは「8月の太陽」[60]という語が、1830年5月14日に印刷所へ送られた、「ヴェリエールに戻る」という挿話に含まれていることと無関係ではあるまい。もともと清書原稿には「9月3日」という設定で国王行幸を主題にした挿話の原型が存在していたはずである。ところが校正の段になって急遽第10章の挿話を書き足したために、スタンダールは正しくは「7月の太陽」とすべきところを誤ったのではあるまいか。

さらにもう一例。第18章末尾には、「その晩、ヴェリエールでは自由派の連中は祝賀の灯を王党よりも百倍も立派にする理由を見つけた。国王はご出発に先だって、モワロ氏を見舞ったのである」[105]とあるように、某国王はその日のうちにヴェリエールを発ったことになっている。ところが第21章のほうでは、「最近\*\*\*国王をお泊めしたという不朽の光栄を有する、町の宏壮な本宅をもっているほかに」[119]と問題の国王がレナール邸に泊まったことになっているのだ。これもやはり第18章の前テキストの設定が、修正されずに残ってしまったために生じた齟齬ではあるまいか。

以上がカステックスの仮説を支持する理由であるが、しかし我々は王太子のグルノーブル行啓が『赤と黒』の創作とまったく無関係であったとも考えない。王太子アンギーレーム公爵は1830年5月3日、リヨン、ヴィエンヌ、アヴィニオン、マルセイユを経由して、軍港のあるトゥーロンに到着した。目的は当地で出航準備中だったアルジェリア遠征軍の激励である。そもそもの軍事介入は、憲章の解釈をめぐり政府と代議院との緊張が高まるなか、世論を国外へとそらすために時の首相ポリニャックがブルモン元帥と策をめぐらした結果であったとされる<sup>31)</sup>。その意味では、王太子の巡幸も聖遺物祭典と同じく、王族の威信強化と体制の維持を狙ったセレモニーと位置づけることができよう。ならば、1830年5月2日の「ガゼット・ド・フランス」紙に載った短信は、単に故郷の話題というだけでなく、やはり政治的な文脈においてスタンダールの関

心を引いたに違いあるまい。同記事以後、政府系新聞のなかで巡幸の経過を最も詳しく報じたのは「モニトゥール」紙であり、アングレーーム公の動向を伝える各地からの便りを3日と空けずに掲載している。しかも5月13日には「ガゼット・ド・フランス」紙が、14日には「モニトゥール」紙が、グルノーブル市長ピナ氏による王太子行啓の布告を掲載した<sup>32)</sup>。これらの記事に目を通したのなら、作家は前年に作成した第18章の前テキストを意識せざるをえなかったはずだ。とまれ、スタンダールが既作の挿話に聖遺物崇拜の主題をさらに盛り込むことを思いつく、その決定的な触媒となったのは、グルノーブルでの王太子奉迎を詳しく伝える1830年5月16日付「モニトゥール」紙の記事だったと思われる――

王太子殿下が午後4時に当市にご到着になった。[…]

わが町と県内の主だった住民からなる、華々しく、かつ大人数の騎馬警護隊がグルノーブルから少し離れた所で殿下をお待ちしていた。[…]

これらの見事な準備、この華麗な軍装の行列は、まさに壮観を呈していた。大砲の筒音と市内中の教会の鐘の音が響きわたり、王位継承者への敬意を表する盛大な一行が蹄の音を轟かせるなか、あらゆる住民たちのあげる歓呼の声が、高貴なる王太子――我らが旧地方の輝かしい名〔Dauphiné〕ゆえに市民にとってはいっそう親しみのわく王太子――に再びまみえて全グルノーブル市民の感じた幸福を高らかに証していた。<sup>33)</sup>

ここで言及されている騎馬警護隊や砲声、鐘の音はいずれも、前年11月6日付「コティディエンヌ」紙の記事ならびに小説の最終テキスト、その両者に共通する重要な細部であるだけに、スタンダールの特別の関心を引いたのではあるまいか。この時、記憶と想像力とを駆使して記事をたどる彼の脳裏には、故郷での奉迎の模様がはっきりと像を結んだであろう。そればかりではあるまい。記事を読みすすむ作家の目に次のくだりが留まったとき、彼のイマジネーションは創造的な活動へと歩みだしていったのではないだろうか――

夜になると煌々たるイルミネーションが街を照らし、通りはすべて白の王朝旗で飾られた。

翌9日、王太子殿下は午前11時に幌をたたんだ四輪馬車で大聖堂へお成りになった。そこへは大将ラン＝ドゥナルジュ伯爵と県知事フィノ男爵が光栄にも随行を許された。



大聖堂へ到着すると殿下は、司教区の司教不在のため、司教座聖堂参事会筆頭、司教代理テストゥー神父によって迎えられた。以下がテストゥー神父による奉迎の辞である。<sup>34)</sup>

イルミネーションへの言及は第18章末尾の「その晩、ヴェリエールでは自由派の連中は祝賀の灯を王党よりも百倍も立派にする理由を見つけた」[105]というくだりを連想させもするが、それ以上に重要なのは、引用箇所が王族による聖堂の訪問という筋立て上の類似を否応なく想起させる点である。同箇所につづいて司教代理の奉迎の辞と王太子の返答が掲載されているが、これは前年のナポリ国王にかんする政府系各紙の記事にはなかった細部であり<sup>35)</sup>、第18章後半の内容にいっそう近い。たしかに1830年5月当時、スペインからの帰路にあったナポリ国王がパリに滞在してはいたが<sup>36)</sup>、しかしそのこと以上に作家の想像世界において国王行幸の挿話と聖遺物崇拜の挿話との結節点となったのは、16日付の「モニトゥール」紙だったと我々は考える。ちなみに引用箇所の後、記事にはさらに作家の注意を引いたとおぼしき一節が登場する。アングレーム公がドランク河の鉄橋を訪ね、設計者である主任技師ルイ・クロゼの熱意と才能を称賛したことが報じられているのだ。拝謁の栄誉に浴する親友の姿を彼は懐旧の念をもってありありと思い描いたに相違ない。

もちろんスタンダールが5月16日の「モニトゥール」紙を読んだ蓋然性は問われてしかるべきであろう。第5章には聖遺物崇拜を報じる記事からの敷き写し、第2部・第4章には政府系2紙の反目など、この時期になっても彼が政府系、反政府系を問わず新聞各紙に小説の素材を渉猟していた痕跡が認められる。しかも5月16日といえば、シャルル10世が下院議會を解散した当日にあたる。数日前に「コンスティテュシヨネル」紙が解散を予測し、きたる選挙に備えるよう自由派陣営に呼びかけているように<sup>37)</sup>、すでにジャーナリズムには政治的緊張が顕れていた。そうした状況にあって「1830年の年代記」を自負する作家が、官報「モニトゥール」紙を含む主要各紙に日々目を通していなかったはずがない。蛇足ながら付言すれば、第18章のなかでさり気なく記された「2週間のあいだ、県下のどの新聞もその記事で埋められたのである」[102]という一文は、この種の式典と報道との関係を熟知した者の筆にはかならず、あえて言えば挿話が新聞から着想されたことを暗に示すものともとれる。

そうすると、第 18 章の大幅な加筆修正がおこなわれたのは、記事の日付である 5 月 16 日以降と推察できるが、さらに時期を絞り込むうえで重要な手がかりとなる創作メモが存在する――

私は 1830 年 5 月 25 日、『ジュリアン』の第 9 葉 (la 9<sup>e</sup> feuille de *Julien*) を校正しながら、いくつかのエピグラフを探す。<sup>38)</sup>

第 9 葉といえば、テキストの第 7 章末から第 14 章末までに相当する。すでに検証した校正の方法に照らすならば、この時点で第 14 章までのエピグラフはすでに活字になっていたはずであり、備忘で言及されているのは第 10 葉に含まれる、第 15 章以降の題辞であったにちがいない。とはいえ、「いくつかのエピグラフ」とあるように、同章以降のすべての銘句が案出の対象になっていたとは考えにくい。原稿提出後になって探さねばならないエピグラフなのだから、常識的に考えて大幅な追加修正稿のそれだと推察できよう。つまり第 18 章の題辞である。同章は章題こそ「某国王のヴェリエール行幸 Un roi à Verrières」となっているが、エピグラフのほうは「聖クレマン礼拝堂における司教の演説」というように、明らかに 1830 年 5 月 1 日以後に、つまり原稿提出後に聖遺物関連の記事から着想された内容である。また第 18 章の含まれる第 11 番目の折丁は、5 月 25 日の段階ではまだ本組の前なので、この頃に銘句が考案されたとしてもけっして不自然ではない。しかも第 9 葉にかんする覚書が記された場所が『アルマンズ』自家用本の第 2 巻、2 頁目の綴じ込み葉紙であることもきわめて示唆的である。第 9 葉の校正のあいまに作家が処女作を繙き、題辞のアイデアを探したことは想像に難くない。『アルマンズ』第 3 章にはシェークスピア『ヴェロナの二紳士』からのエピグラフがあるが、興味深いことに『赤と黒』第 17 章のそれも同じ戯曲から採られている。これがまったくの偶然でないとするならば、5 月 25 日に作家が探していたのは第 11 番目の折丁（ちょうど第 17 章冒頭から第 18 章の途中まで）のための題辞であったと推測できよう。第 17 章の題は「主席助役」であり、章の半ばに置かれた主席助役をめぐる挿話が第 18 章の伏線となっている。ならば、この日付の頃、スタンダールが同章だけでなく前後の章を含めた修正稿を作成していたと考えてしかるべきである。

では『赤と黒』第18章の成立について、以上の検証から浮かびあがったことを時系列にそって整理しておこう。まずスタンダールは1829年11月中旬にパリで、ナポリ国王のグルノーブル行幸を報じる同月6日付の「コティディエヌ」紙に題材をえて、同章の前テキストを作成したと思われる。この段階では社会諷刺と主人公たちの願望の成就をモチーフにして、騎馬警護隊の組織や式典の準備、奉迎の模様などが描かれたと推測する。翌年4月29日、フランス国王が聖ヴァンサン・ド・ポール聖遺物を崇拝し、5月はじめに政府系新聞各紙がその詳細を報じた。すでに第1部の原稿は印刷所で組版の最中であつたが、記事に想をえた作家は第5章の修正をおこなった。当該修正箇所が第3番目の折丁に含まれることからみて、本組校正刷をもちいた著者校正のはじまる5月10日までに、彼はその修正稿を作成して印刷所に渡したはずである。さらに同月16日、こんどは「モニトゥール」紙に掲載された王太子グルノーブル行啓の記事が第18章の前テキストを見直す契機となつたと思われる。25日になってスタンダールが同章のエピグラフを探した蓋然性は大きく、おそらくこの10日間のうちに彼はその修正稿を作成したと推定できるのである。

### 3. 〈聖堂〉のテーマ

聖遺物祭典に端を発した修正について、第18章を中心におよその工程をみてきたが、こんどはそれを踏まえつつ修正の内容を検討しよう。シャルル10世の聖遺物崇敬にかんする報道は、じつのところ同章だけの着想源だつたのではない。スタンダールにとって件の新聞記事は『赤と黒』のテキスト全体にわたって〈聖堂〉という主題を豊かに発展させる契機だったのであり、第18章の修正もそうした一連の創造行為の一部をなしている。このとき作家がほかに手直した箇所は、第5章と第28章である。これら2つの章が、第2部・第35章の狙撃の場景といかに緊密な呼応関係にあるかは、すでにジュヌヴィエーヴ・ムイヨーの緻密な分析が明らかにしている<sup>39)</sup>。とはいえ、その考察は第18章を対象外としているだけに、再検討の余地は依然として残されていよう。では、各章ごとに順を追って、〈聖堂〉をめぐる内容の改変がどのようなものであつたのかを見ていくことにしたい。

まず第5章のばあい、リブランディの指摘した新聞記事からの逐語的な敷き

写しを含む箇所が重要な意味をもっている<sup>40)</sup>。すなわち、ヴェリエールの教会内部の描写である――

教会は薄暗く、人の気配もなかった。なにかの祭礼があったらしく、建物の窓はすべて深紅の布 (étoffe cramoisie) でおおわれていた。そのために太陽の光線が射すと、たいへん荘重な、宗教的な感じをあたえる、まばゆいばかりの色彩を呈した。ジュリアンは身震いした。御堂のなかにただ独りで、彼はいちばんりっぱそうに見える席に腰をおろした。その席にはレナル家の紋章が打たれてあった。[24]

記事とほとんど違わぬ表現によって〈赤〉という主調色を付与された教会の内部は<sup>41)</sup>、跪台にのこされた紙片や血の色を呈する聖水などと連携することで暗示的・象徴的な空間を構成する。もちろん、同じ教会のなかでジュリアンがレナル夫人を狙撃するという筋立てを念頭においていたからこそ、作家はふたりの出会い（第6章）の直前に、彼らの悲劇を暗示するヴェリエールの教会という場景を設えたはずである（このとき同時にスタンダールは第2部・第35章の教会にも、「建物の高い窓は深紅の窓かけ rideaux cramoisis でおおわれていた」[432] という重要な細部を加筆しようと考えついていたと思われる）。ならば、テキストにおいて〈赤〉という色が象徴的な価値を帯びるにいたったのも、このような改変の結果であり、国王による聖遺物崇拝の記事こそ、ミヨーの分析する「赤のシークエンス」、あるいはアンリ・ジャクーベがいみじくも「赤と黒による真の交響」<sup>42)</sup>と呼んだ主題系の、まさに源泉に位置づけられるのではないか。そして第5章の修正によって生じた象徴性をスタンダールそのひとがはっきりと意識したがゆえに、テキストの審美的収斂をなす『赤と黒』という題が選択された可能性はここで強調しておかねばならない<sup>43)</sup>。ロマン・コロンの証言によれば、『ジュリアン』から『赤と黒』へとタイトルが変更されたのも、「1830年5月のある朝」であった<sup>44)</sup>。しかも作家の備忘に初めて『赤』という題が登場したのは同年5月10日、『赤と黒』と記されたのは同12日である以上<sup>45)</sup>、題名の変更はすでに我々が推測した第5章末尾の修正時期と重なる。記事の発行日を考慮するならば、作家が先に題を改め、それに沿うような材料を聖遺物崇拝の報道に採りだしたという可能性はきわめて小さい。スタンダールは記事の文面から、第2部・第35章でクライマックスの舞台となるヴェリエールの教会を、まずは第5章に暗示的空間として配備しようという

アイデアをえて、その際に〈赤〉という色にテーマ色としての決定的な重要性を付与するにいったのだと思われる。題名変更を思い立ったときの、「そうだ、これを『赤と黒』と呼ばなければ」という作家の言葉は<sup>46)</sup>、なによりも偶然の発見に特有の喜びを伝えていよう。4月末に第2巻の原稿を渡し終え、第1巻の校正刷を待っていた時期、『赤と黒』にかかわる仕事で確認できるのは第5章への修正だけであるとすれば、この改変が意義深い題名の発見に直結した蓋然性は否定できまい。いやそればかりか、これを見いだした喜びは新たな創造的修正への意欲となったはずである。

第18章は、我々の推測では5月16日から25日までに内容の手直しがおこなわれた。聖遺物崇拜というモチーフを国王の行幸という挿話のなかに組み込むという大きな再構築が作業の中心をなしたことは確かだが、ただしその目的は単に風俗描写によって内容的な肉づけをすることだけではなかった。やはり第5章の修正と同じく、ここでもブレー＝ル＝オーの修道院という宗教的な空間の予示的かつ象徴的な設定が確認できる。その意味では作家の修正意図は一貫しているといってよい。もっともムイヨーが「赤のシークエンス」の分析から第18章を除外しているように、修道院を舞台にした挿話の主調色は一見して〈赤〉とはいえず、また同挿話は第2部・第35章の狙撃の場景とも直接的には呼応していない。同じ新聞記事を着想源にした修正にもかかわらず、再構成の過程で導入されるイメージの数々は別の広がりを見せているのである。

まず主人公の願望に焦点を絞るならば、第18章の中段を占める、アグドの司教を中心にした挿話は前段と対をなす関係にあるのが分かる。ジュリアンの英雄主義的な願望とレナール夫人の庇護者的な情愛とが二重奏をなす前段の展開から、あの新しい教会の再登場を合図にして物語は鮮やかに転調していく——「陛下はこの日、深紅の帳ですっかり飾られた美しい新築の教会へ馬車を着けられた」[98]。とりわけ注目すべきは、スタンダールが「深紅の帳 rideaux cramois」<sup>47)</sup>という、色彩にかんする細部を付与した点である。とうぜんこれは第5章の修正、その際にテーマ色として採用された「深紅 cramoi」<sup>48)</sup> [24] を強く意識してのことであつたろう。この一文につづいて、ジュリアンがレナール邸へ馳せ帰るや親衛隊の制服を脱ぎ、剣、肩章と順に外したあと、ふたたび黒服を身にまとうのを読むとき、否が応でも我々はこの転換点にひとつのライトモチーフが仕掛けられているのを認めざるをえない。というのも第5章から第

6 章にかけての一連の展開では、主人公のナポレオン崇拝が提示された直後に<sup>47)</sup>、暗示的な〈赤〉の教会が配備されていたばかりか、教会を後にした主人公がレナール邸で着るはめになるのが例の黒服だったからである。つまりスタンダールは、これらの要素がなす構図をそのまま第 18 章の前段と中段の展開で変奏しているのであり、その転換点にあえて〈赤〉の教会を再登場させることで、章の流れにおける英雄主義的夢想から現実的野心への切りかえを際立たせたのだ。かかる仕掛けからも、第 5 章の修正を踏まえての第 18 章の再構築だったという修正の時間的順序が看取できよう。

ジュリアンはブレー＝ル＝オーの修道院に到着後、こんどは法衣と白い袈裟を身につける。だが、「僧衣の長いひだの下から、親衛隊の拍車がのぞいている」[99] その姿は、ナポレオン崇拝を内に秘めつつも、僧服やお仕着せなどの黒服を身にまとい、王政復古期の現実在即して立身出世の道をあゆむ主人公の両義的な生きざまを見事に象徴する。このようないでたちでジュリアンはアグドの司教と対面することになる。彼は上流風の洗練された若き司教に己の未来を投影する<sup>48)</sup>。いうまでなく、それは彼の野心が理想とする姿、世俗での到達点であろう——「司教の年の若さを見てめざめた野心、その人の感じのこまやかさ、気持のいい上品さ、そういうものがジュリアンの心をすっかりかき乱していた」[102]。章の前段では軍服姿の主人公をあれほど鼓舞してやまなかった砲声も、もはやただの騒音と化す——「だがこのすばらしい音響も、もうジュリアンにはなんの魅力もなかった。彼はもうナポレオンの武勲のことなど思ってもみなかった」。

司教に触発された野心の世俗的な側面をいっそう強調するのが〈金銭〉のテーマである——「あれでいくらの収入があるんだろう。おそらく 230 万フランかな」。このすぐ後でも〈金銭〉は、ラ・モール侯爵の負担した祭典の費用というかたちで再登場する。ただしこちらのほうは、現実の聖遺物祭典のもつ一側面が顔をのぞかせていると解するだけでは不十分であろう<sup>49)</sup>。アグドの司教にジュリアンを重ね合わせるならば、やがて後者を華々しく出世させるという第 2 部における侯爵の役割もが透けて見える——「甥を司教にしたラ・モール侯爵は、甥に対する心づくしから、その費用全額を自分ひとりで引きうけてやったのだ。ブレー＝ル＝オーの祭典だけの入費が 3,800 フランであった」。

このように、アグドの司教を中心にした第 18 章の中段部分は、明らかに主人

公の世俗的な栄達というモチーフに呼応するように構成されていることが分かる。それでは後段のほうはどうであろうか。「国王が入御された」という短い一文によって分節される後段部分は、それまでとは一変して野心を忘れた主人公の感動と高揚とを壮麗かつ荘厳な空間のなかで描いてみせる。まず冒頭に登場する、「謝恩の頌歌 Te Deum が歌われ、香の煙がたちのぼり、小銃と大砲がひっきりなしに発射された。百姓どもは幸福と法悦に恍惚としていた」[103]というくだりは、すでに第18章のそれまでの展開において相次いで登場した英雄主義的モチーフと宗教的モチーフとがあたかも融合するがごときイメージを呈する<sup>50)</sup>。これを序として聖遺物の儀式はその舞台を修道院のなかの「灯明の間」に移す。金泥で縁取られた扉の奥は、千をこえる灯明と金塗りの壁のなす眩い光、無数の花束とお香の妙なる薫香、漏れ聞こえる鐘の音、そして美しく清純な乙女たちなど、これらすべての織りなす神秘的かつ官能的なイメージが横溢する空間である。いまや恍惚とした主人公の眼差しをとおして描きだされるのは、神々しい聖者の姿である――

それ〔聖クレマンの像〕は若いローマの兵士の服装をして、祭壇の下に隠されていた。頭に大きな傷があって、そこから血が流れているように見える。作者は腕以上の効果をあげたのだ。死にひんした眼は慈愛にあふれて半ば閉じられている。生えかけの髭が、半開きのまま折りつづけているように見える口を飾っている。[104]

軍服姿の聖者、それはまさしく主人公の存在そのものを逆転したイメージにおきかえたものと解するならば、ここに第18章のそれまでの展開――英雄主義的な夢想とアグドの司教に触発された野心――を総合するモチーフを見ることが許されよう。克明に描かれた聖クレマンの臨終の姿は、さらに主人公の死する姿さえも連想させるのではあるまいか。じっさい「灯明の間」の一連の場景は、アンリ＝フランソワ・アンペールやアラン・シャントローの指摘するとおり<sup>51)</sup>、小説の掉尾をかざる葬儀の場景とは多くの付帯的要素によって呼応しており、いわばその象徴的な前兆としての役割をもつ（そもそも「灯明の間 chapelle ardente」とは通常、灯火をともした霊安室を指す）。

とはいえ、これら2つの場景の間に暗示的モチーフのみを見て終わるのであれば、テキスト構築の理解として充分ではない。第2部・第45章での簡潔な筆で描かれた葬送のシークエンスをたどるとき、あたかも映画の2重写しのごとく

主人公の遺骸に聖者のイメージが透けて重なる。ならばスタンダールが処刑から葬儀にいたるまで主人公の〈死〉にまつわる細部描写を意図的に避けたのは、その予示的表象である聖クレマンの克明な描写とのイメージの二重化を介して、ジュリアンの死に崇高な光背をあたえるためであろう——聖者の像のみならず「灯明の間」をみたす金色の光や薫り、鐘の音、花、乙女、これらが渾然一体となって喚起する奥深い統一は、エクスタシーに身を委ねる主人公の魂そのものと照応している。このように、「灯明の間」の場景にあらかじめ配した象徴的イメージの数々が葬儀の場面においてオーバーラップのごとき効果をもつこと、それが作家の狙う仕掛けであったと考えられる。

もはや第18章の改変意図もおおむね判明したと思う。物語のクライマックスと主人公の処刑とを暗示する要素として第5章に〈赤〉の教会を設え、テキストに審美的な膨らみをあたえたのと同様に、スタンダールは第18章を手直ししようと思いついた。こちらのほうではブレー＝ル＝オーの修道院を舞台に導入し、主人公の葬儀に呼応する「灯明の間」の場景によってその死を象徴、かつ崇高化したのである。つまり作家は5月初めの聖遺物祭典の記事から、2種の〈聖堂〉を同じ美学的配慮のもとに相次いでテキスト上に築いたのだ。ただし第18章についてのみ付言すると、重要なのは〈聖堂〉の果たす役割だけではない。主人公と各主要モチーフを中心に全体構成を見るならば、同章は次のように3つの展開に分けることができる。

まず前段は国王行幸の知らせから奉迎の儀式までであり、ジュリアンの英雄主義的な願望とレナール夫人の庇護者的な愛情が挿話のモチーフとなっている。つぎに中段の展開を牽引するのはジュリアンの世俗的な野心である。前段との転換点には〈赤い教会〉が登場するだけでなく、彼の衣装も軍服から黒服、さらに僧服へと交替する。これに応じて英雄主義的色調は急速に弱まり、かわってアグドの司教が登場して主人公の出世欲を掻き立てる。司教の若さや物腰に目を奪われるジュリアンの姿は、野心の鏡に映じた自己の理想像を見るがごとくであろう。最後に後段は、修道院への国王の入御にはじまる。葬儀の場景と照応する「灯明の間」のモチーフとなっているのは、軍隊的イメージと宗教的イメージの融和であり、いわば主人公によるニルヴァーナ体験である——「この有様を見て、われらの主人公はわずかに残っていた最後の理性までも失ってしまった」[104]。煌々たる灯明の光、清純な香の妙なる薫り、深い静寂



をやぶる遠い鐘の音、ただちに魂はこれらと溶け合い、ジュリアンは恍惚となる。そして彼は法悦のうちにあって、そうとは知らずに己の〈死〉と対面するのである。軍装の聖者が絶え入らんとする姿はまさに、〈軍人〉と〈僧侶〉との間で二者択一をいきる主人公の生の極点を寓意している。忘我の境地もまた、前段の英雄主義的願望と中段の立身出世の野心とを止揚し、その生の条件から一時のあいだ彼の魂を解放する——その意味では、「灯明で燃えあがっている」かのような観を呈する金色の礼拝堂もまた、眩い光と熱気でもって〈赤〉と〈黒〉の対照・対立を揚棄する空間となっている。

さて、章の構成をこのようなものとして理解するならば、第18章全体をジュリアン・ソレルの精神的な縮図と見なせよう。つまりスタンダールは〈聖堂〉という予言的・象徴的な空間を単に前テキストに嵌め込んで良しとしたのではなく、主人公の精神史を一望に見晴らす〈中心紋〉として章そのものを作りかえたのである。このことによってまた、第5章と第18章とは緊密な呼応関係をなし、テキストの美学的な構造をいっそう強固にしたのだ。

宗教儀式を核にした作家の想像力の飛翔はしかし、これで終わってしまったわけではない。1830年6月1日には、筆耕をやとって第1部・第28章が口述筆記される。同章はブザンソンの大聖堂を舞台にした挿話で占められているが、まずはこの点からだけでも創造的イマジネーションの核となっていたのが、〈聖堂〉という主題であったことが再確認できる。たしかにムイヨーのいう、この「第2の赤いシークエンス」は、第5章や第2部・第35章と多くの共通項をもち、それらのヴァリエントとも見なせる<sup>52)</sup>。聖体祭のために大聖堂の柱が「緋緞子の布 *habit de damas rouge*」[183]で覆われると、聖堂内はまたもや〈赤の空間〉と化す。興味深いことに通常、聖体祭には白い布が用いられるのだが<sup>53)</sup>、ここでスタンダールが慣行に反してまで〈赤〉に固執した点からも、一連の修正におけるこの主調色の重要性が推し量れよう。やがて準備が整い、聖霊発出を告げる大鐘が響きわたる——

つづげざまに打つ、その荘重ないい音色は、ジュリアンの心を動かした。彼の想像は、もはや地上を離れた。

焚く香のかおりや、聖ヨハネの扮装の童子たちが、聖体の前にふりまく薔薇の花びらが、彼の心をすっかり俗界から引き離した。[184]

注目すべきことに、ここには「灯明の間」で主人公の見せた法悦と相同の心境が再登場している。それはジュリアン・ソレルの本質がまさに露呈する瞬間である。作家は語り手の口を借りて次のように言わずにはおれない——「彼なぞは、一生けっして立派な聖職者にも、偉い役人にもなれないだろう。こういうふうに感激したりする魂から生まれるものは、せいぜい芸術家ぐらいなものである」[185]。第18章と第28章の宗教的祭式をめぐる挿話をさらに強く結びつけるのは、主人公の恍惚とした眼差しが予言的な光景に直面するという事態である——

閑散さと底知れぬ淋しさと、長い脇間の冷たさが、ジュリアンのうっとりした夢をいっそう快くした。[……] 彼の魂は、頼まれた聖堂の北面をゆるゆる歩いている現し身を抜けだしかかっていた。[……] その目は見るともなしに、ぼんやりと眺めているばかりであった。

しかしその間に、彼の放心しきった目にとまる、ふたり連れの身なりのよい婦人があった。ひとりとは懺悔所のなかで、もうひとはすぐ傍の腰掛けに跪いていた。

懺悔所のなかにいた婦人が、この静まりかえったなかに響いてくるジュリアンの足音に気がついて、ちょっと頭をふりむけた。と、たちまち微かな叫び声をあげて、そのまま失神しそうになった。

いうまでもなく懺悔所の女性にはレナール夫人であり、「緋緞子の布」によって〈赤の空間〉と化した聖堂内で彼女がジュリアンを見て倒れる光景は、第2部・第35章に登場する狙撃の場を、人物の配置や肉体の動きを介して動的に暗示するものだ<sup>54)</sup>。つまりスタンダールは、第1部の校正作業がかなり進んだ段階で、すでに第5章でもちいたのと同じ要素（聖堂、緋緞子の覆い、厳かな雰囲気等）を再導入しながら、こんどは劇的な一幕を設えることで物語のクライマックスを予示しようとしたのである——彼が第5章の静的な予兆と第2部・第35章の山場とのあいだに、第28章の動的な予兆を配置したのは、物語をつらぬく漸層法的構成をも意図してのことであつたろう。だが、このとき作家は同時に第18章の「灯明の間」という暗示的かつ象徴的な場をもまた念頭におき、そこに配した主人公の恍惚と予言的光景という組合せを再び採用することによって、〈狙撃の場〉だけでなく〈主人公の葬儀〉という別のテーマに連なる「灯明の間」とのあいだにも太い照応の糸を結んだ。この結果、『赤と黒』において〈聖堂〉という主題はイメージの重層化による奥の深い象徴性

を獲得したといっても過言ではあるまい。

## 結 語

最後にスタンダールと宗教儀式との関係について触れておこう。第18章および第28章において祭式に臨んだ主人公の味わう恍惚感<sup>55)</sup>は、すでに指摘されているように<sup>55)</sup>、『アンリ・ブリュラルの生涯』で語られるような作家の個人的体験をつよく想起させる——「一生を通じて宗教の儀式は私をこのうえなく感動させた」<sup>56)</sup>。このことはもちろん、主人公像のうちに自らの気質を溶かし込むというスタンダールの創作手法をよく示すものであろう。だが、かような証言が我々にとって看過しがたいのは、第18章を中心に検証してきた一連の修正を当初の着想に遡って理解するためである。なかでも、『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』に登場する「私は大聖堂や教会の昔風の儀式に対してある種の共感をおぼえる。しかし、それらはほんとうに昔風の必要がある」という一節は<sup>57)</sup>、なにゆえ聖ヴェンサン・ド・ポール聖遺物祭典についての報道が着想源となりえたのかを教えてください。移送の儀式は、記録によれば贅を尽くし壮麗であっただけでなく、たいへん時代がかったものであったという<sup>58)</sup>。だからこそスタンダールは特別の関心を抱き、また関連記事に心を強く動かされたのであろう。あるいは、じっさいに彼はパリで移送の祭典を目にしたのかも知れぬ。彼はこのころ第2部の原稿を仕上げつつあった。さらに数日後、国王による聖遺物崇拝の記事を目で追ううち、政治的な関心は薄れ、ある光景がまざまざと眼前にあらわれたのではなかったか。いや、それは湧きあがった思い出の映像だったのかもしれない。いずれにせよ、作家は極度の感動のうちに深紅に染まった建物の内部を、あたかも幻視者のように見た。つまり彼は事後の光景を、罪人が独り現場にたたずむように茫然と視<sup>み</sup>、戦慄したのだ。このとき無意識のうちに想像的同一化がおこる——「ジュリアンは身震いした」[24]。彼の主観的なヴィジョンは、そのまま主人公の視点に移しかえられる。第5章ばかりか、第18章や第28章においても、〈聖堂〉の場景ではジュリアンの目線から事物が捉えられているのは、そうした着想の型を示すものだ。慄然としてスタンダールが〈光景〉にいったい何を讀みとったのかは、第5章に登場する跪台の紙片や血の色を呈する聖水が雄弁に物語っていよう。それらはいずれも〈光

景〉についての解釈にほかなるまい。だが解釈するとは、まさしく象徴を、予兆を読むことである。いずれの場景でも主人公が暗示的な光景に立ち会うという同一の構図こそ、作家がまさしく啓示をえたことを翻って証していよう。スタンダールはただちに第5章の修正稿を書きあげる。その余韻いまだ覚めやらぬうち、彼は王太子行啓の記事を読み、第18章の修正を思い立ったのではあるまいか。ならば、〈聖堂〉をモチーフとする一連の修正は、構成に長けた芸術家の才もさることながら、忘我の感動が創造的イマジネーションの原動力となった事例だと結論できるのである。

## 註

- 1) 次の拙論を参照されたい——「母性愛とヒロイズム——『赤と黒』第1部・第18章の制作——」, 『ステラ』第22号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2003年12月, 45-64頁。
- 2) テクストにはガルニエ版 (STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*. Texte établi avec sommaire biographique, introduction, bibliographie, variantes, notes et dossier documentaire par Pierre-Georges CASTEX. Édition revue et mise à jour, illustrée de 16 reproductions, Paris : Bordas, coll. «Classiques Garnier», 1989) を使用する。訳出・引用箇所の変数は [ ] 内に数字で示す。ただし同一頁からの引用が連続するばあいには、最初の引用にのみ出典を付す。なお訳出にあたっては、人文書院『スタンダール全集』所収の邦訳 (『赤と黒』桑原武夫・生島遼一共訳) を参照したが、文脈によっては筆者が改変を施した箇所がある。
- 3) Voir *Le Temps*, 26 avril 1830, p.4. 「ガゼット・ド・キュルト」紙は1830年4月25日, 同29日とつづけて、聖遺物関連行事を舌鋒鋭く批判した。いずれの記事も同紙が展開していた一連の反政府・反教権的なキャンペーンの一部であるが、この反響がいかに大きかったかは、国教とパリ司教、さらに国王を侮辱し、市民階級を煽動したとして、国王政府の側が発行責任者ブリソー氏を告訴した事実に見えよう (voir *Le National*, 20 mai 1830, pp.3-4)。
- 4) Voir Claude LIPRANDI, «Sur un épisode de *Le Rouge et le Noir*. Un roi à Bray-le-Haut», *Revue des Sciences Humaines*, juillet-septembre 1950, pp.141-160.
- 5) STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor DEL LITTO, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1981-82, t. II, p.195.
- 6) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition Victor DEL LITTO avec la

collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E. SLATKINE, Paris : Libr. Honoré Champion, 6 vol., 1997-99, t. III, pp.764-765. 契約書には入稿期限が1830年4月末と記されている。

- 7) STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., p.128.
- 8) *Idem*.
- 9) Voir Théophile GAUTIER, *Portraits contemporains*. Littérateurs-peintres-sculpteurs-artistes dramatiques. Avec un portrait de Théophile Gautier d'après une gravure à l'eau-forte par lui-même vers 1833, Paris : Bibliothèque Charpentier, 1914, pp.79-82. 同じく、柏木隆雄『謎とき「人間喜劇」』, ちくま学芸文庫, 2000年, 7-24頁を参照。
- 10) マルチノの考えによれば、原稿は校正刷の出来に応じて順々に渡されたことになる (voir Henri MARTINEAU, *L'Œuvre de Stendhal. Histoire de ses livres et de sa pensée*, Paris : Le Divan, 1945, pp.328-330)。つまり、第1巻冒頭数章の原稿が校正刷となって印刷所から戻ってきてから、次にその後続部分数章の原稿を渡すという見立てである。マルチノの考えは、作家があらかじめ原稿をすべて出版社に渡していないという推測にもとづく。しかし後掲する1830年4月12日付の備忘によれば、当日作家は第1巻最後の原稿を送付しており、明らかにこの推測は成り立たない (ちなみにマルチノは最初の原稿が出版社に渡った時期を5月初旬としている)。ルヴァヴェッサール書店との契約締結日は同月8日、つまり第1巻の原稿を渡し終えた4日前であることを強調しておこう。
- 11) STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., p.128.
- 12) Voir Pierre LAROUSSE (éd.), *Grand Dictionnaire Universel du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris : Larousse, 1866-1888, 17 vol., t. 7, p.761.
- 13) STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., p.129.
- 14) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris : Levasseur, 1831, 2 vol., t. I, pp.1 et suiv.
- 15) STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., p.129.
- 16) *Idem*.
- 17) *Ibid.*, p.143.
- 18) *Ibid.*, p.130.
- 19) *Ibid.*, pp.343-344.
- 20) ただし1827年に上梓された『アルマンズ』のぼあい、『赤と黒』の校正作業とは異なっていたと思われる。スタンダールは1827年6月11日、出版者ユルバン・カネル等と出版の契約を交わしているが、それによると作家が校正刷を返送する際、特別に印刷費を要する修正をしたならば、それは作家が負担すること、また校正の期間は7月5日迄であることが明記されている (voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., pp.631-634)。だが、同年7月17日付カネル宛の書簡を読むと、作家は期限を過ぎても校正を終えていないばかりか、まだ原稿をすべて渡していな

いことが分かる——「昨晚、第2巻最後の校正刷を校正しました。/木曜日に田舎に行かねばなりません、もし直さねばならないなにかの校正刷を木曜日の晩に確実にいただけるのであれば、金曜日までは居るつもりです。/もう原稿のほうは最後の40頁だけですが、それらは明日お送りします。/今朝、緒言を送りました。F氏の意見に従い、「緒言」という語は削除します。/今週中に終わらせることが出来ないでしょうか。ビュロ氏のところのF氏に手紙を書きました。校了の前に緒言についての彼の考えを聞けたらいいのですが」(*ibid.*, p. 643)。この手紙にもとづいてレイモン・ルベグは、『アルマンズ』の原稿は出来しだい順々に出版者に渡されたと推測しているが (voir Raymond LEBÈGUE, «Avant-propos» pour *Armance ou quelques scènes d'un salon de Paris en 1827*. Texte établi et annoté par R. LEBÈGUE. Préface de André GIDE, in *Œuvres complètes*, Nouvelle édition établie sous la direction de Victor DEL LITTO et Ernest ABRANEL, Genève : Cercle du Bibliophile, 50 vol., 1967-74, t. 5, p. XXXVIII), はたしてそうなのだろうか。作家が自家用本にのこした備忘を読むと、契約の時点で原稿はすでに完成しており、しかもきれいに仮綴じされていたことが分かる (voir Victor DEL LITTO, «Stendhal, lecteur d'*Armance* (Exemplaire interfolié Bucci)», *Stendhal Club*, n° 71, 15 avril 1976, p. 199)。さらに、1827年7月19日に書かれたと思いき出版者宛の手紙には、仮綴じの原稿はいったん出版者に渡った後、ふたたび作家の手元に返されたことが記されている——「この緒言は原稿を渡したとき、それに付けていました。改行によって段落の数を増やすために原稿を返してもらったとき、緒言はもう無くなっていたのです」(voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., p. 644)。これによると、スタンダールは改行などの微調整を目的とした原稿の修正をしたと考えられるが、仕上がりしだい原稿を順々に印刷所に渡していく作業は、とうぜん途中から校正作業と並行しておこなうことになり、その結果、清書原稿の渡しは7月18日までかかったと推測できる。ちなみに7月17日付の書簡で言及されている「金曜日」、すなわち7月20日にスタンダールはイタリアへ旅立っているので、校正の期間は最大に見積もっても40日と短い。ところで、7月19日に書かれた手紙にも興味深い一節がある——「最初の48頁の再校 (la 2<sup>e</sup> épreuve des 48 premières pages) を受け取りました。初校にはなかった新たな誤植があります。まだそれを校了としません (je n'y mets pas encore le bon à tirer)」(*idem*)。『アルマンズ』の初版本は12折判の3巻本だが、言及されているのはどの巻の最初の48頁(折丁2つ分)なのであろうか。ともかく、前掲17日付の手紙によれば、作家は翌18日になってようやく同巻最後の原稿40頁を版元に送っている以上、全体を通して再校をとったとは考えにくい。また同書簡では「なにか校正すべき校正刷 quelque épreuve à corriger」があればと記されているように、作家のほうで特定の校正刷を想定しているわけではない。おそらくは印刷所の判断でとくに誤植の多かった箇所だけ再校を刷ったのではあるまいか。ただし奇妙なのは、スタンダールが問題の再校をまだ校了にしないといいながら、翌20日に

はイタリアへと発ってしまったことだが、この点にかんしては、作家は『アルマンス』の校正を最後は出版社に委ねた蓋然性が高い。

- 21) リリー・フェルバーグによれば、1829 年以降、作家の経済状況は一段と悪化していた (voir Lily R. FERBERG, *Stendhal et la question d'argent au cours de sa vie*, Aran : Éd. du Grand-Chêne, «Collection stendhalienne 19», 1975, pp.52-53)。1829 年初頭すでに貯金は底をつき、重要な収入源であった英国誌寄稿分の稿料もなくなり、あてにできたのは終身年金 (年額 1,600 フラン) と退役年金 (年額 450 フラン) だけだった (cf. STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, p.691)。9 月になって『ローマ散策』の原稿料 1,500 フランを手にするも、スタンダールはすぐに南仏・スペインを巡る旅行で相当の出費をしている。『ルヴェ・ド・パリ』誌に発表した『ヴァニナ・ヴァニニ』(12 月), 『箱と幽霊——スペイン奇譚』(翌年 5 月), また「タン」紙や「ナショナル」紙等への寄稿, そして『赤と黒』の原稿料前払い分 600 フランなど, これら稿料をすべてあわせたとしても, 1830 年 5 月当時の作家の経済状況には校正に金をかける余裕がなかったといえよう。
- 22) *La Gazette de France*, 2 mai 1830, p.3.
- 23) Voir CASTEX, «Notes», in *Le Rouge et le Noir* [éd. de Castex], op. cit., p.581.
- 24) 王党派 2 紙の対立についてはカステックスが詳しく論じている。Voir Pierre-Georges CASTEX, *Horizons romantiques*, Paris : José Corti, 1983, pp.66-67.
- 25) 王政復古期をつうじてスタンダールは、政府系・反政府系を問わず多種多様な新聞を読んでいる。作家が仏紙からフランス社会の実相を析出してイギリスの雑誌に伝えるいっぽうジャーナリズムを独自の手法で創作にも生かした点にかんしては、次の実証的な論考を参照——栗須公正「王政復古期のスタンダール——ジャーナリズムから小説へ——」, 南山大学『アカデミア』文学・語学編, 第 67 号, 南山大学, 1999 年 6 月, 368-374 頁。このように新聞各紙に一通り目を通す習慣は 1830 年にも続いていたはずであり、その主たる渉獵の場となったのは「読書クラブ cabinet de lecture」だったと思われる。フランソワーズ・バランによれば、王政復古期を通じて読書クラブの数は右肩上がりに増え続け、1829 年にはパリ市内だけで 465 軒にのぼり、それぞれの店は得意客とする社会階層に応じて店舗を充実させた。たとえばパレ＝ロワイヤル近辺には外国人が多いので、ヨーロッパ数カ国とアメリカの新聞をバックナンバーまでそろえた高級店があったし、カルチュ・ラタンには専門の論文集を貸し出す店があったという。また裕福な街区にあるパサージュにはたいい出版関係者のひらく読書クラブがあり、文学書や新聞を豊富にとりそろえていた。利用料金は店構えにより異なるが、店の読書室で新聞を読むばあい、営業時間内なら何時間でも 15 サンチームが相場であったという (フランソワーズ・バラン「パリの読書クラブ——復古王政下における文化行動と社会空間——」(山田登世子訳), 『都市空間の解剖』所収, 新評論, 1985 年, 211-252 頁参照)。
- 26) 第 2 部・第 45 章には次のように国王の名が登場する——「レナール夫人の友人で影に立ちまわることの好きなある女が、この単純で気の小さい人に、サン＝クルー

へ行ってシャルル 10 世王の膝下にひれ伏して嘆願することがあなたの義務だと、説きすめたのである」[486]。

- 27) Voir Pierre-Georges CASTEX, «Un roi à Grenoble», in *Stendhal et Balzac II. La province dans le roman*. Actes du VIII<sup>e</sup> Congrès International Stendhalien. Nantes 27–29 mai 1971. Textes réunis et présentés par Alain CHANTREAU, Nantes : Société nantaise d'études littéraires, 1978, pp. 78–79.
- 28) *La Quotidienne*, 6 novembre 1829, pp. 2–3 ; voir aussi *Le Moniteur universel*, 7 novembre 1829, p. 2.
- 29) *Idem*.
- 30) 前掲拙論 55–60 頁参照。
- 31) Voir CASTEX, «Notes», in *Le Rouge et le Noir* [éd. de Castex], op. cit., p. 626.
- 32) Voir *La Gazette de France*, 13 mai 1830, p. 1 ; voir aussi *Le Moniteur universel*, 14 mai 1830, p. 2.
- 33) *Le Moniteur universel*, 16 mai 1830, p. 2. 記事には王太子のグルノーブル行啓が 2 度目であることが記されているのだが、第 18 章には「7 年前のさる親王のご通過のおり」[95] という興味深い記述がある。
- 34) *Idem*.
- 35) Voir *La Gazette de France*, 8 novembre 1829, p. 1. 同紙によればナポリ国王は日曜日の朝、大聖堂へ赴き、フランスの国王と同様の典礼に則って司教に迎えられたとのみ短く記されている。ちなみに 11 月 6 日の「コティディエンヌ」紙はこのミサのことには触れていない (cf. CASTEX, *art. cité*, p. 81)。
- 36) Voir Anne-Marie MEININGER, «Notes», in *Le Rouge et le Noir* de Stendhal. Préface de Jean PRÉVOST. Édition établie et annotée par A.-M. MEININGER, Paris : Gallimard, coll. «Folio classique», 2000, pp. 757–758.
- 37) Voir *Le Constitutionnel*, 14 mai 1830, p. 1.
- 38) Victor DEL LITTO, «Stendhal, lecteur d'Armance (Exemplaire interfolié Bucci) II», *Stendhal Club*, n° 72, 15 juillet 1976, p. 278. ところで、注意しなければならないのは、覚書の「第 9 葉 la 9<sup>e</sup> feuille」という記述である。上記の報告を作成するにあたってヴィクトル・デル・リットは、ブッチ家の所蔵する『アルマンス』自家用本の自筆メモをじっさいに自分の眼で検証したと述べている。そうであるだけに転写された記述内容の信頼性はきわめて高いといえるのだが、ところがその後、彼が編纂したプレイアッド新版『私的作品集』のほうでは、同じ備忘の記述が「第 3 葉 la troisième feuille」と替わっている (STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., p. 129)。それなのになぜ我々が前者の記述、すなわち「第 9 葉」のほうを採用したのか、その理由を以下に説明しよう—— 1830 年 5 月 25 日付自筆メモの初出は、管見によればジャンピオン版『スタンダール全集』の『赤と黒』第 1 巻である。校訂者ジュール・マルサンが序文のなかで件のメモをとりあげたのだが、彼は問題箇所を「第 9 葉」と記している (voir STENDHAL, *Le Rouge*



*et le Noir*. Texte établi et annoté avec une introduction historique par Jules MARSAN. Préface de Paul BOURGET, in *Œuvres complètes*, Paris : Libr. Ancienne Honoré Champion, 33 vol., 1913-40 [1923], 9<sup>e</sup> vol.-t. I, pp. LI-LII)。マルサンはこの覚書の情報を、同全集で『アルマンズ』の校訂を手がけたレイモン・ルベークから入手したと述べているが、しかしイタリアまで赴いて作家の自筆メモを転写したのはルベーク本人ではなく、ポール・アルブレとアルマン・カラッチョの2人である (voir Paul ARBELET, «Stendhal relu par Stendhal. Dans la bibliothèque de Stendhal à Civita-Vecchia», *Revue de Paris*, 15 novembre 1917, pp. 405-430)。しかしアルブレ自身は問題の備忘を上記論文に収録しておらず、マルサンの次にそれを活字化したのは、ディヴァン版『スタンダール全集』の編纂者アンリ・マルチノである (voir STENDHAL, *Marginalia et Mélanges intimes II*, in *Œuvres complètes*. Préface, établissement du texte et notes par Henri MARTINEAU, Paris : Le Divan, 79 vol., 1927-37 [1936], p. 78)。ただし『マルジナリアと私的雑文集』に収録された覚書を見ると、問題の記述は「第3葉」となっている (このとき彼はメモの情報源については明記していない)。ところがこれ以後、彼は自著や校訂版にて同メモを挙げるばあい、「第3葉」ではなく「第9葉」と修正してしまう (voir Henri MARTINEAU, *Le Calendrier de Stendhal*. Avec la collaboration de Jules LEFRANC et de Marion LIÈVRE, Paris : Le Divan, 1950, p. 249 ; et aussi ses «Notes et variantes», in *Armance ou quelques scènes d'un salon de Paris en 1827* de Stendhal. Texte établi avec introduction, bibliographie, notes et variantes par Henri MARTINEAU, Paris : Garnier Frères, coll. «Classiques Garnier», 1950, pp. 264-265)。マルチノの修正が何に拠るのかは不明だが (彼自ら『アルマンズ』ブッチ本で確認したのでないとするば、単に印刷作業で生じた数字の取り違えを直しただけなのかもしれない)、とにかく彼は「第9葉」が正しいと最終的に考えたようである。では、デル・リットによるプレイアド新版『私的作品集』に話を戻そう。彼はこれに先立ち、ビブリオフィル版全集中の『日記』に1830年5月25日付の備忘を収録し、問題の箇所をディヴァン版と同じく「第3葉」としているが、それも当然で、彼はこの覚書の出典がディヴァン版『マルジナリアと私的雑文集』であることを注記している (voir STENDHAL, *Journal*. Texte établi, annoté et préfacé par V. DEL LITTO, in *Œuvres complètes* [éd. de Del Litto et d'Abravanel], op. cit., [1969], t. 32, pp. 64 et 309)。ただし、転載にあたってデル・リットが序数詞にアラビア数字を用いずに、「la troisième feuille」と文字で綴っている点を留意されたい。このような処理は前述したどの研究者もおこなっておらず、彼独自の判断によると思える。ところが7年後、こんどは『スタンダール・クラブ』誌上で、彼は自らの実見のもとに問題箇所をアラビア数字で「第9葉」と活字化するのだ。アルブレとカラッチョによる転写、マルチノの修正、デル・リット自身による転写、そのいずれもが「第9葉」である以上、我々はこれを正しい記述として現段階では採用する次第であ

る。それでは、なぜデル・リットはブレイアッド新版のほうで再び「第3葉」と改めたのか。この重要な変更について説明はなく、彼の意図は推測するほかない。同版では序数詞がアラビア数字ではなく「la troisième feuille」と文字で記されている点から考えて、前述したビブリオフィル版のデータを何かの手違いで再録してしまった、というのがおそらく事の真相ではあるまいか。だが、いずれ我々自ら『アルマンズ』ブッチ本にあたって、この問題を検証しなければなるまい。

- 39) Voir Geneviève MOUILLAUD, «*Le Rouge et le Noir*» de *Stendhal*. *Le roman possible*, Paris : Larousse, coll. «Thèmes et Textes», 1973, pp. 151-236.
- 40) Voir LIPRANDI, *art. cité*, pp. 155-156.
- 41) 1830年5月1日付の「モニトゥール」紙に登場する文面——「建物の多くの窓は深紅の布で覆われていたので、そのために太陽の光線が射すと、きわめて荘重で宗教的な感じをあたえる、まばゆいばかりの色彩を呈した Comme les nombreuses croisées de l'édifice ont été couvertes en étoffe cramoisie, il en résulte, aux rayons du soleil, un effet de lumière éblouissant, du caractère le plus imposant et le plus religieux.」(*Le Moniteur universel*, 1<sup>er</sup> mai 1830, p. 2)。前述したように、5月2日の「ガゼット・ド・フランス」紙にもまったく同じ表現がある (voir *La Gazette de France*, 2 mai 1830, p. 1)。ちなみに『赤と黒』で問題箇所原文出处は次のとおり——「À l'occasion d'une fête, toutes les croisées de l'édifice avaient été couvertes d'étoffe cramoisie. Il en résultait, aux rayons du soleil, un effet de lumière éblouissant, du caractère le plus imposant et le plus religieux.» [24]。
- 42) Henri JACOBET, *Stendhal*, Paris : Éd. de la Nouvelle Revue Critique, 1943, pp. 171-172.
- 43) 題名についてはすでに多くの解釈が提出されているが、決定的なものがないというよりも、むしろ多様な解釈の可能性が開かれている点こそ、テキストのもつ豊穡さの証なのであろう。ただしミシェル・クルーゼの指摘するように、テキストで〈赤〉と〈黒〉の2色が同時に出現するのはただ1箇所であり、題名を手がかりにテキスト全体の潜在的構造や色彩の規則を探る試みが袋小路におちいる危険性は否めない (voir Michel CROUZET, *Le Rouge et le Noir. Essai sur le romanesque stendhalien*, Paris : PUF, 1995, pp. 13-20 ; voir aussi Serge BOKOBZA, *Contribution à la titrologie romanesque : Variations sur le titre «Le Rouge et le Noir»*, Genève : Droz, «Collection stendhalienne 27» 1986, pp. 119-128)。しかしながら、1830年5月におこなわれた第5章・第18章・第28章の修正過程において〈赤色〉が特権的かつ詩的な価値をもっていたのは明らかであり、同時期につけられた小説の題名とまったく無関係であったとも考えにくい。
- 44) Voir Romain COLOMB, *Notice sur la vie et les ouvrages de Henri Beyle (de Stendhal)*. Texte annoté et préfacé par V. DEL LITTO, in *Œuvres complètes* [éd. de Del Litto et d'Abravanel], op. cit., pp. 316-317.

- 45) Voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., p. 128.
- 46) COLOMB, *op. cit.*, p. 317.
- 47) 第5章では主人公のナポレオン崇拜から現実的野心への転換が示される——「教会の建立と治安判事の判決ぶりを見て、ジュリアンは急にさところがあった。あるひとつの考えが頭に浮かんで、数週間まるで夢中になった。[...] ボナパルトの名が世に鳴り響いたのは、ちょうどフランスが外敵の侵入に怯えているときだった。だからこそ武勲は必要でもあり、また流行でもあったんだ。今日では40歳の僧侶で10万フランの給料、つまりナポレオン軍の有名な中将たちの3倍ももらっているのが幾人かある。[...] 僧侶にならなくちゃならない」[24]。
- 48) アグドの司教のモデルについては諸説があるが、リブランディは聖遺物祭典の仕掛け人である、パリ司教ド・ケラン猊下を挙げている (voir LIPRANDI, *art. citée*, pp. 143-148)。とくに英国雑誌への寄稿のなかでスタンダールがこの人物をナポレオン軍の元将校と取り違えている事実は興味深い。なぜなら軍人から司教へと華々しい転身をとげたド・ケラン司教という人物設定ならば、主人公像とも重なるだけに、彼の野心を触発する存在としてはうってつけだからだ。
- 49) Voir *Le National*, 20 mai 1830, pp. 3-4, et voir aussi *Le Constitutionnel*, 27 mai 1830, p. 3. 祭典に要した莫大な費用も反対陣営による批判的となった。
- 50) しばしば『赤と黒』の読解において〈僧侶〉と〈軍人〉は対立する要素と見なされがちであるが、しかし C・W・トンプソンによれば、スタンダールの小説世界において両者の間に認めるべきはむしろ類似性である (voir C. W. THOMPSON, «L'armée ou l'église : sur les ressorts latents du dilemme héroïque chez Stendhal», *Stendhal Club*, n° 83, 15 avril 1979, pp. 228-252)。つまり作家にとって真の〈軍人〉と〈僧侶〉は、積極的な価値を帯びた少なからぬ共通項をもち、それゆえ二者択一的な選択としてつねに彼の主人公たちの生の前に置かれるのだという。だとすれば、「灯明の間」の序となる両モチーフの融合を単に風俗的・表層的な次元でのみ捉えてはならない。「灯明の間」に祀られた聖者の像が軍服姿という、両イメージの融合そのものであることを考慮するならば、ここでの融合はその予示的なモチーフとなっていると見なせよう。
- 51) アンペールは2つの場景を結びつける要素として、葬式の終わりにマチルドが群衆にばらまく数千枚の5フラン貨幣と、聖遺物祭典のあとラ・モール侯爵が農民たちにふるまう1万本の葡萄酒とを挙げている (voir Henri-François IMBERT, *Les métamorphoses de la liberté ou Stendhal devant la Restauration et le Risorgimento*, Paris : José Corti, 1967, pp. 580-581)。いっぽうシャントローは「灯明の間」と主人公の葬儀という2つの場景を綿密に比較している (voir Alain CHANTREAU, «Le symbolisme religieux dans *Le Rouge et le Noir*», in *Le symbolisme stendhalien*. Actes du colloque universitaire de Nantes, 21-22 octobre 1983. Textes réunis et présentés par Jean-Claude RIOUX, Nantes : Éds. ACL, 1986, pp. 238-239)。彼の考察を踏まえて、2つの場景を次のように結び

つけることができよう。「灯明の間」が長い階段をのぼる修道院の上部に位置するのと同じく、葬式の舞台となるのはジュラの高い山の頂近くにある洞窟であり、空間的な高さによって精神の崇高さが強調される。また「灯明の間」において祭壇にならぶ千本以上の蠟燭が聖遺物を照明するように、マチルドの灯した幾本もの蠟燭がテーブル上のジュリアンの首を照らし、ついで彼の「異様な葬儀」[488]は「無数の蠟燭の光」に包まれた洞窟の内部で厳かにおこなわれる。ちなみにシャントローは指摘していないが、空間的な閉鎖性・排他性も両場景に共通している。いずれも「少数者」にのみ許された空間なのである。

- 52) Voir MOUILLAUD, *op. cit.*, pp. 151-156.
- 53) Voir CASTEX, «Notes», in *Le Rouge et le Noir* [éd. de Castex], *op. cit.*, p. 566.
- 54) 第2部・第35章の問題場面を挙げておく——「ジュリアンはヴェリエールの新築の教会へ入っていった。建物の高い窓は深紅の窓掛でおおわれていた。ジュリアンはレナール夫人の腰掛の数歩うしろに来た。夫人は一心に祈祷の最中と見えた。[...] このとき、ミサを勤めている若い僧侶が奉供の合図のために鐘を鳴らした。と、レナール夫人はうつむきかげんになったので、少しのあいだ、顔がまったく肩掛の襖のなかに隠れてしまい、ジュリアンには、はっきりそれがレナール夫人と見分けられなくなった。彼はピストルの引金をひいた。あたらない。2発目を撃つと、夫人はばったり倒れた」[432]。
- 55) Voir CASTEX, «Notes», in *Le Rouge et le Noir* [éd. de Castex], *op. cit.*, p. 549.
- 56) STENDHAL, *Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes*, *op. cit.*, p. 709.
- 57) STENDHAL, *Rome, Naples et Florence (1826)*, in *Voyages en Italie*. Textes établis, présentés et annotés par Victor DEL LITTO, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1973, p. 509.
- 58) Voir Charles Louis LESUR, *Annuaire historique universel pour 1830*, Paris : Thoisnier-Desplaces, 1832, pp. 56-57.